

伝統の創造と地域学：平成傘福物語

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学府教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7385174>

出版情報：国際教育文化研究. 13, pp.199-212, 2013-07-26. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



伝統の創造と地域学

—平成傘福物語—

坂元 一光

はじめに

本稿は「庄内傘福研究会」（工藤幸二会長）主催の市民シンポジウム「伝えよう未来へーみんなの傘福ー」（酒田市・山形県後援）における記念講演「伝統の創造と地域学—平成傘福物語—」の記録をもとにしている。講演を準備する過程ではこれまで気付かなかった新しい発見や観点を得ることができた。これも講演の機会を与えてくださった「庄内傘福研究会」の皆様や、また吹雪の週末、会場まで足を運んでくださった大勢の市民の方々のおかげと心より感謝している。幸いにして、今回『国際教育文化研究』誌上に機会を得たので、文末に簡単な補論「傘福とさげもんの習俗比較」を加え、当日の講演内容を再録、補足することにした。

＊ 紙幅の都合により講演記録は適宜省略している。

<記念講演：伝統の創造と地域学 —平成傘福物語—>

皆さんこんばんは。つるし飾りに導かれて、九州は福岡からやってまいりました坂元と申します。私はこの数年、酒田を含め日本各地のつるし飾り習俗について全国をまわりながら調査をしてまいりました。本日は、他の地域との比較の観点も交えながら酒田の新しい吊るし飾りの伝統である「平成傘福」（スライド2）について拙いお話をさせていただきたいと思っております。

近年、日本では都市化・少子高齢化が急速に進んでおります。地域の伝統文化に対して強い逆風が吹いているといえます。大都市の消費文化、ライフスタイル、そうしたものが次々に流入し、地方文化の「のっぺらぼう化」とでも言いましょうか、そういう事態が進みつつあります。また、伝統文化を受け継ぐ若い人たちが都市へどんどん流出する、そういうような状況もございます。本日ここにいらっしゃっている皆さまや私のように、地域に根付いた伝統文化に関心や愛着を持つ者にとってなかなか厳しい状況にあると言えます。そこで本日は、こうした逆風を少しでも跳ね返せるような、少し元気の出るお話をご紹介しますと思っています。

最初に本日の話題であるつるし飾り習俗について少し確認をしておきたいと思います。手工

芸細工としての吊るし飾りは地方によっては、「さげもん」（柳川）であるとか「傘福」（酒田）であるとか、あるいは「雛のつるし飾り」（稲取）とか、様々な呼ばれ方があるわけですが、歴史的には江戸時代、裕福な商家の娘さんが身近な端切れを用いて小物入れとして作っていた「ちりめん細工」に由来すると言われていています。現在は、「つるし飾り」という総称で日本の三地域を中心に伝承されています。いずれもひな祭り行事の中に組み込まれ、全国的にもよく知られるようになってきました。それぞれ地域ごとの特色が見られますけれども、基本的には地域の女性による手芸伝統として今に受け継がれ、地域の活性にも一役買っています（山崎 2006）。

(1)シンポジウム風景



(スライド 1)

(2)庄内空港の傘福



(スライド 2)

1. 柳川のさげもん

酒田の「傘福」のお話に入る前にまず、私の研究の出発点となっている九州柳川のつるし飾り「さげもん」についてご紹介してみたいと思います。「さげもん」とは「下げるもの」を意味する九州の言葉です。柳川では「さげもん」を活用した観光事業によって、一時下火になっていた「さげもん」の習俗が活発化いたしました。さげもん作りも目に見えて盛んになったと言われています。観光事業が地域の伝統文化の活性、あるいは起爆剤としての役割を果たした、そういった例ということができると思います。

「さげもん」は女の子の初節句のときに、母親あるいは祖母、あるいは親戚から、お祝いに贈られる祝いの飾りです。形式としては、竹で作った輪の下に等間隔に三本の糸を下げ、それぞれの糸に七つの手芸細工を下げます。中央には、これが柳川の特徴ですが、大きな「御殿まり」を二つ下げます。合計で 51 個の飾りから構成されています。そしてこれを二さげ一対用意して、お祝いとして贈るのです。

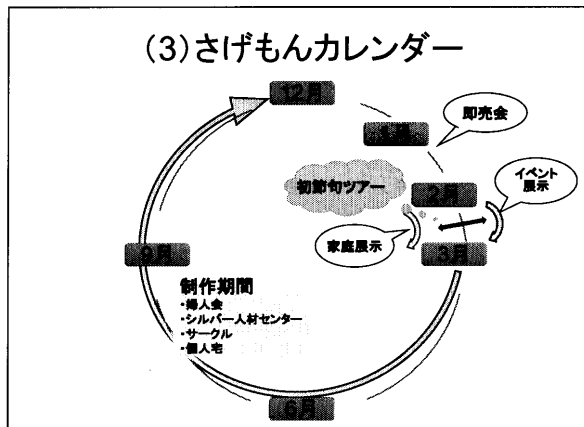
細工物の種類とか個数とかいうものは、今でこそ明確に説明されるのですが、古くからの決まり事というものではないようです。「さげもんめぐり」と銘打った観光事業が定着するにつれて、外部の観光客を意識した説明が決められていったようです。一般家庭の初節句にもよくお邪魔するのですが、そうした形式に則った立派なものもありますが、それ以外にも非常に素朴な自由に作られた飾り物も多く見ることができます。それはひな人形飾りの両脇に幾つも下げられ華やかな雰囲気醸し出します。

平成 6 年に全国的な渇水がございました。柳川はもともと風情あふれる堀割の景観で有名で

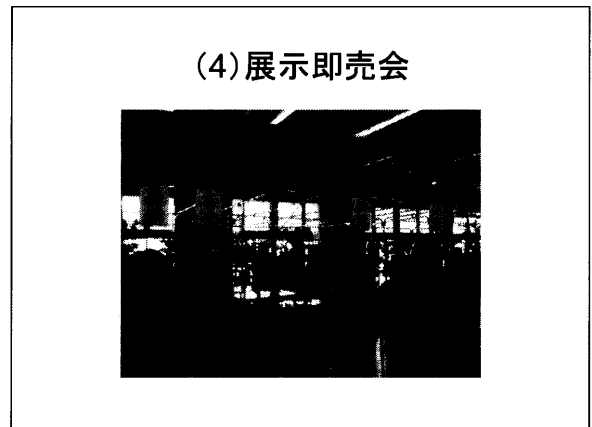
すが、水が涸れてしまい観光が成り立たなくなりました。そこで新たな観光資源として再発見されたのが初節句のおひな様とそれに添えられた吊るし飾りであったわけです。こうして春の観光イベント「さげもんめぐり」が誕生しました。平成7年のことです。町中につるし飾りを下げて、約2ヶ月間、華やかなひな祭りの雰囲気地域全体で盛り上げます。現在では柳川観光の目玉として定着しています。その結果、地域の内外で「さげもん」に対する関心や需要が高まり地元でのさげもん作りも盛んになっています。

【さげもん作り活性の背景】あらためてさげもん作りの活発化の背景を確認しておきますと、まずは観光イベントの中につるし飾りの習俗を組み込んだということがひとつあります。これによって観光客の関心が高まりました。土産物市場が形成されました。それから、もともとはおばあちゃんやお母さん、親戚がこれをつくってお祝いの品として贈るというものだったのですが、昨今、そうした時間がないとか、技術がないという現実があります。そこで既製品のさげもん購入してお祝い品として贈るという人も増えています。そして重要なことはそれを作り、供給しているが地元の中高年の女性たちなのです。女性のライフスタイルというものが変わってきて趣味を兼ねたさげもん作りが盛んになったという背景も考えなければならぬと思います。さらに柳川には有名な女学校があり、そこでは古くから裁縫教育を行っておりました。そこを卒業した地元の女学生たちの間に裁縫の基本的な技術が分かち持たれていたことも要因のひとつに考えられると思います。

【さげもんカレンダー】柳川のさげもん習俗について年間を通して理解していただこうとカレンダーをつくってみました。(スライド3) カレンダーを見るとさげもんをめぐるいろいろな活動は大きく二つの時期に分けることができると思います。それは「めでる時期」と「つくる時期」です。「めでる時期」は、さげもんめぐりというひな祭りイベントが始まる二月の上旬あたりから四月三日までの期間になります。それが終わりますと、今度は「つくる時期」に入ります。この「つくる時期」と「めでる時期」が転換する節目というものがあります。それが一月の最終週に行われる「さげもん展示即売会」です。この時にそれまで地域でつくり貯められてきたさげもんがまとめて一気に展示即売されます。お土産物として買う人であったり、贈り物として買う人であったり、会場には毎年大勢の客が押し寄せます。この時期以外にもさげもんは販売されるのですが、地域全体のさげもんづくりの成果が最も集約的に表れるのは、この展示即売会の時だといえます。これが展示即売会の様子です(スライド4) 体育館をまる二日間借り切るわけですが、ここで地元の婦人会とシルバー人材センターの方々が一年間かけてつくったつるし飾りが即売されます。お土産物屋や人形店で買うこともできるのですが、飾りの質や価格からここで買うのがやはり一番得だということでたくさんの客が集まります。基本的に作り手さんはアマチュアです。趣味の延長でこういったものをつくるわけですね。ですけれども「手が良い」(技術が高い)と周囲から認められる作り手さんは品物に自分の名前を添えて売ようになります。作家の卵が誕生していく、そういうプロセスかもしれません。



(スライド 3)



(スライド 4)

【伝統のやわらかなつながり】ここでひとつ面白いエピソードをご紹介します。 「伝統」とは何かとか、「伝統を繋ぐ」ということについて考えさせられる話題であると考えています。これは、ほかの地域でも聞いた話ですが、つるし飾りが全国的に注目されるようになるとともに、類似の製品やイベントというものが周辺地域でも増えていっているのですね。これに対しては当然危機感のようなものが芽生えてきます。似たような吊るし飾りやイベントがなにか雨後のタケノコの如く増えていって、自分たちの吊るし飾りやイベントのオリジナリティが相対的に薄くなってしまふ。これではいけないということで、今年、柳川では地域独特の伝統の様式を決め、それにそって作られたものに認定証を発行しようということが考えられました。結果は極めて不評であったと聞いています。それは、作り手さんにとっても、買い手にとっても、同じくあまり評判が芳しくなかったのです。買う人たちにとって、古い伝統の様式というのはいまどきのセンスにあまり合ってなかったようです。なにか触手が伸びない、そのように見えたようです。そして作り手さんです。こちらはもっと大事な問題をはらんでいると思います。基本的につるし飾りの製作は趣味活動なのですね。楽しいからやっている。自由なアレンジ、自由なチャレンジといえるようなことがあって始めて、楽しく創作活動ができる。しかし、認定制度によって型にはめられた窮屈な創作活動になってしまい、作り手さんにとってもあまり評判がいいものではなかったようです。伝統というものを昔ながらの型にはめると考え、形を固定しようとする、それを支える人たち（作る人とめぐる人）がそこから離れてしまう。そういう現実を象徴的に表しているような気がしております。全ての伝統がそうだとは言いませんが、少なくとも多くの地元女性関わって成り立っているつるし飾り習俗の場合は、創作活動の楽しさややりがい保障されていることが持続と活発化のポイントだと思います。やはり楽しく作って（参加して）こそ、未来に繋がるのですね。それで作り手さんも再生産されると思います。柳川の女性たちをさげもん作りに駆り立てているのは、またさげもん作りの伝統を動かしているものは、能動的で積極的な創作活動の場であり、そこにおける一種のワクワク感（チャレンジやアレンジの喜び）ですね。だからなにか正しいお手本があって型通りに作ることはないのではないかと思うのです。

伝統というのは、じつは新しい時代の文脈の中で、新しい要素を取り込みながら常に変化し

続ける、それによって命脈を保つ、そのようなものではないかと考えています。伝統は常に変化する。伝統は常に新しい。変化することで時を超えて持続する力を獲得する、そのようなものだろうと認定証のエピソードに触れたとき感じました。

2. 酒田の平成傘福

ここで、いよいよ酒田の傘福のお話なのですが、酒田の傘福についてここでお話するのはとても緊張します。よそ者がこちらの地元の話をする。完全アウェーの気分なのですが、勇気を振り絞って少しお話を続けさせていただきたいと思います。

酒田の傘福は柳川のさげもんと同様に、観光事業に組み込まれております。そして女性を中心とした伝統の手芸細工という意味では、非常に似通っているのですね。しかし、何回かこちらを訪問させていただいて、その事業の様子を見せていただいている中で、やはり随分違っていることにも気づかされました。何よりも「新しい伝統のプロデュース」とでも言いましょうか、酒田の傘福事業はそういう取り組みに映りました。地域や民俗文化の継承に興味を持っている人間の目から見ると伝統が新しく創造されるまさにその現場に立ち会っているような気がしております。またプロデュースされた伝統というものが、ここが大事なのですが、少しずつ市民生活に根付きつつあるということですね。この点も私にとっては、とても興味深いものがあります。いうならば「作られた伝統」というものが「生きられた伝統」になっていく。まさにそういったプロセスを目の当たりにしている気がします。これが酒田の傘福事業あるいはその周辺に展開している現象であると私には思えてなりません。ですから酒田の新しい伝統が生まれつつあるまさにその瞬間を目撃させてもらっているという、そういう興奮も覚えるのです。

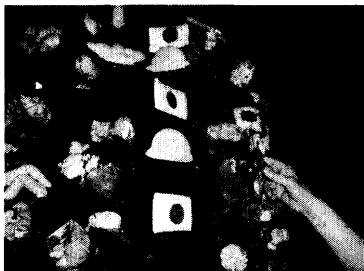
ご存知のようにこの新しい伝統「平成傘福」をプロデュースされたのは、地元の酒田商工会議所の女性会の皆さん方です。柳川同様、ここでも地元の女性たちが大きな役割を果たしています。「平成傘福」は二系統の傘福を組み合わせて作られたと言われています。これは傘福研究会の工藤先生からご教示いただきました。それで私のさまざまな疑問が氷解した気分になりました。

傘福事業は女性会の創設25周年事業として地域資源を発掘し観光振興に結びつける。それだけでなく地域文化の価値を再評価するということも同時に進めようとする事業です。大変貴重な事業だと思っています。ご存じのようにこの事業の成果は毎年「酒田雛街道」の時期に行われる傘福の集中展示に見られます。今年は新しい企画ということで「清亀園」を会場に古い傘福を集めて展示してあります。関係者の皆さんが知恵を絞って毎年いろいろな企画を考えられています。こうしたこともやはり伝統を動かしていくというか、新しい伝統を次に繋いでいくのに必要な大事なことだと思っています。

【傘福の二系統】さて新しい「平成傘福」なのですが、二系統の伝統傘福を組み合わせられていきます（工藤 2010）。伝統の傘福はそれぞれ独自の伝統と由来を持つものがあります。それは祭礼系と祈願系に分けられるのですが、特に祈願系の傘福は、現在も庄内の各地域に受け継がれていることを、私自身も確認してきました。そのいくつかを古いものから3つほどご紹介したいと思います。まず昭和45年の皇大神社の傘福です（スライド5）。傘福と

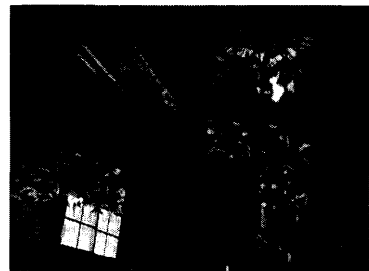
いうとどうしても華やかで、また子どもを思う優しい気持ちが反映していると思いがちですが、時代とともにその様子も違うのです。鉄兜や日の丸、戦車とか、そういう細工物を作って飾っているのです。傘福も時代の雰囲気の中かでこんなにも変わるのだということを改めて気づかされました。次は「龍沢寺」の傘福です。これも昭和のものですけれども、すこし新しいものです。これにはそこに奉納した方の名前を書いた短冊が下がっている。もちろんその当時の地域の女性たちで作ったわけですが、古いものになりますと自分のお母さんであるとか、お舅さんの名前があつたりするわけですね。それを見るととても感慨深いものがあるというふうに伺いました。「光伝寺」(スライド 6) に参りまして撮影させていただいたものですが、平成 15 年の記載があつて、つい最近のものです。私はこういうものは古いものしかないのではと思っていましたが、平成に入ってもこういう形で祈願系の傘福が奉納されていることを知りました。

(5) 皇大神社の傘福



(スライド 5)

(6) 光伝寺の傘福

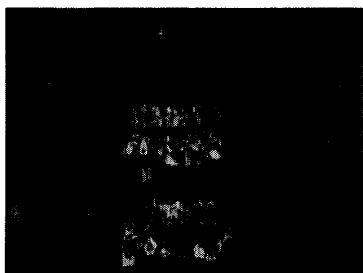


(スライド 6)

つぎに祭礼系ということになるのですが、これは皆さまもよくご存知の山王まつり現在の酒田まつりを描いた屏風絵です。そこで昔登場していた「傘鉾」も今の傘福のもうひとつのモデル、すなわち祭礼系の傘福と言われております。昔は傘鉾の乗った大きな山車を引き回して祭りを盛り上げていたようです。この傘鉾を小さなミニチュアにして家で飾ることが行われていたようです。これ(スライド 7)が本間美術館にある祭礼系の傘福のミニチュア版です。もうひとつは酒田あいおい工藤美術館にある亀傘鉾のミニチュアです(スライド 8)。もちろん、どこの家にでもあるというものではありません。網元や豪商などやはり裕福な家でしかこういったものは飾られなかったと推測されます。祭礼系は形とか内容が祈願系とはずいぶん違うようです。

(7) 祭礼系の傘福

(「本間美術館」蔵)



(スライド 7)

(8) 亀傘鉾のミニチュア

(「酒田あいおい工藤美術館」蔵)



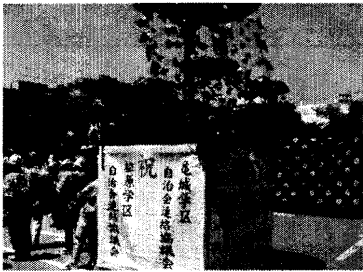
(スライド 8)

そこで私なりに二系統の傘福の特徴をちょっと整理してみました。それをいくつかの項目ごとに比較をしてみますとずいぶん性格が違うことに気づかされます。祭礼系の傘福の場合、祭礼の傘鉾飾りを受け継いでいて祝祭や富の豊かさを象徴する内容が見出されます。祈願系の場合は、神仏祈願のための呪具というのでしょうか、私は絵馬の3D版みたいなものと理解しています。設置場所もずいぶん違います。祭礼系は個人のお金持ちの家の居間に飾られている。祈願系は寺社の屋内です。対象ですが、祭礼系の場合は祝いに来たお客や自分たちのために展示され、祈願系の場合は神仏に対して奉納されます。民俗学では、ハレとケという時間の分け方をするのですが、祭礼系は非日常的な場面や時間すなわちハレの時に展示をする。祈願系の場合、必要に応じて奉納するということで日常の時間(ケ)のなかに位置づくだろうと考えています。このほか細工物の内容ですけれども、祭礼系の方は豪商、網元の家に飾るものですから、商売繁盛や富につながるような吉祥物、蔵の鍵とか宝袋などが多く下がっている。祈願系の場合は五穀豊穡、子宝、それから子どもの健康や成長が細工物の姿に込められています。祭礼系の作り手さんは専門の職人です。ミニチュアを見ていただくとよく分かるのですが、材料も高価で非常に手が込んでいます。一般庶民はとても購入できないし作れるものではありません。これに対して祈願系の細工物はもっと素朴です。地域の女性の手作りで、上手下手もあるのですが、基本的には端切れを使った質素なものです。

【新伝統の浸透】これから見ていただくのは、「平成傘福」が新しい伝統として市民生活のなかに少しずつ浸透していることを感じさせる場面です。まずこの時期、庄内空港に降り立つと傘福が出迎えてくれます。観光客向けのお土産物の傘福も売られている。そして3月この時期、商店街を歩きますとこういう風に傘福の飾り付けがなされています。そして一般の人形店にも並んでいます。それから去年の酒田祭りですが、大変賑わいました。たくさんの山車につるし飾りがさげられているのを見ることができます(スライド9)。しかし実はこれは地元ずっと暮らしている人たちにとっては非常に新しい現象ではないかと思うのですね。たぶん、ここ6、7年のことなのではないでしょうか。でもいつの間にか当たり前、普通のこととして祭りのなかに定着していること、子ども達にもだんだんとそういう感覚が広がっていつている。酒田の文化、伝統なのだという気持ちがしだいに子ども達の心に植え付けられていると思っています。

それからこれは、神宿（トヤ）の宝物展示ですけれども（スライド 10）、これも結構大事だと思うのです。昔は祭りの詰所であると同時にその地域の宝物、珍しいものを集めて展示しそれを皆が愛でる場でもありました。そこにいつの間にかきちんと、地元の方が作られたと傘福が飾られるようになっていく。全然違和感なく置かれている。見る人も違和感がない。やはりこれは確実に定着しつつあると言っていると思います。

(9) 酒田祭りの山車



(スライド 9)

(10) 頭屋の展示



(スライド 10)

【地元学/地域学へ】最後に酒田の平成傘福を語る際に落としてはならない大切な点に触れておきたいと思います。それはそのルーツである伝統傘福の調査活動や修復活動ですね。これは傘福事業の過程で生まれた傘福研究会の手によって進められているとても重要な取り組みであると思っています。なぜ重要なのか。この伝統傘福の調査というのは、平成傘福との連続性や繋がりを実証的に明らかにするという作業です。それは新しい傘福のいわば文化的な品質保証の作業です。これが単なる思いつきで作られたものではないこと、互いに姿こそ違いますが根っこのところでつながっていることを示すのが調査活動なのです。さらにこのことは観光事業そのものを持続可能なものにすると思います。一過性で終わらせるのではなく、持続可能なものにする役割も果たすと私は考えています。ルーツをしっかり語れること、それは傘福という地域の文化資源の価値を保証し、高めることにつながると考えております。それから修復活動ですけれども、これは地域の人々を巻き込んだ伝統文化の実践的な学習活動であると思います。特に祈願系の傘福の修復作業は地域の人々にとって世代を超えた縦の繋がりを、あるいは氏子や檀家といった地域の横の繋がりを再確認する絶好の機会を提供していると思います。また私も含めた傘福の調査活動の眼差しは、自分たちの地域に貴重な伝統があり自分たちがそれを身近に生きているという地元の人々の想いを呼び起こすかもしれません。伝統に対する地元の人たちの誇りや愛着を促すといったことにも繋がるのではないかと勝手に期待しています。

調査活動や修復活動ですが、それ自体もうすでに地域学としての一步を踏み出していると私は思っています。地域の住民が自分たちの生きる地域についての学習、調査を通して文化固有価値を発見し、ものづくりあるいは生活作り、豊かな生活、地域づくりの実践へとつないでいく、そういう思想とか技法を学ぶこと。これを地域学、地元学と呼びます。傘福研究会のメンバーが地域の人々と一緒に行う修復活動や調査活動はまさにこれではないかと考えます。

では最後まとめたいと思います。私自身個人的に各地のつるし飾りの習俗というのを見て回っています。そこから見えてきたことを簡単にお示しすれば、次のように整理することができるかもしれません。まずは女性の伝統手芸です。これは地域の活性に結びつく非常に大きな潜在力を持っていると思います。それを活用し、生きた伝統として再起動する。そのためには観光の仕掛けというのが、カギを握っているということも感じております。それから伝統手芸に関わる人々です。これは作る人たちだけではありません。それを愛でる役回りの人たち、すなわち観光客の裾野を広げてゆくことが非常に大切であろうと考えています。また伝統をプロデュースする人々も含め作り手さんたちには自由な発想や創造の機会が開かれていることが大切です。そこに伝統を賦活した新しく創造する力が生まれるように思います。一方、古くからの伝統、これに関する歴史とか民俗、それらの正確な知識を集積することも忘れてはならないと思います。それが先ほど申し上げました伝統の持続可能性とか持続可能な観光、文化的な品質保証、あるいは地域学に繋がっていくだろうと確信しております。

よそ者の見方で、研究者の見方で、勝手なことをいろいろと申し上げてきました。しかし私のようなよそ者を上手に活用することも地域学の重要な手法だと聞いております。私の拙いお話がそういうふうにお役に立つのなら、こんな嬉しいことはございません。長い時間ご清聴ありがとうございました。

＜補論：傘福とさげもんの習俗比較＞

今回の話題で取り上げた柳川や酒田の吊るし飾りは、初春のひな祭り観光イベントに結び付けられることで地元民だけでなく市外からの観光客の目も楽しませている。吊るし飾りの習俗を伴うひな祭りイベントはその手芸細工の数や種類、華やかさにおいてさらに際立った特徴を持っており、全国の数ある同種の催しの中でも地域ならではの独自色を出すことに成功している。以下、両地域の吊るし飾りを伴う観光イベントの現状を、とくに吊るし飾りの制作活動を軸にしつつ、イベントと地域習俗との関係、両地域の吊るし飾りの持続と変容、吊るし飾り制作と地域住民との関係、文化資源の活用における社会的責任等の問題に着目しながら、簡単に見てゆきたい。

＜柳川のさげもんカレンダー＞

両地域の吊るし飾り習俗及びそれにちなんだ観光イベントの比較作業においては、まずその全体的概観を可能な限り地元の人々の生活の文脈に添いつつ俯瞰的に捉えていくことが必要である。ここでは柳川の現状を理解する時間枠組みとして「吊るし飾り習俗カレンダー」なるものを想定する。吊るし飾りの製作から展示までを一連の活動として一年を通して理解し、比較していくことにする。

柳川の女性たちの一年を吊るし飾り（さげもん）の習俗やイベントに焦点化して見ていったとき、それは大きく 1) 初春の祝い行事として初節句家庭でのさげもんの展示と鑑賞、地域を代表する制作集団である婦人会、シルバー人材センターの展示即売会での展示と鑑賞、観光ひ

な祭りのために地域、商店街をあげて展示された雛人形飾りやさげもんを鑑賞する、いわば「まねく/めでる」期間と、2) 初節句の贈答や趣味活動のため地域の女性たちが仲間同士集まり、あるいは自宅で、毬や袋物の手芸細工を制作する時期、いわば「つどう/つくる」期間と、に分けられる。民俗学的な時間範疇を当てはめるならばそれぞれハレの期間とケの期間に相当するだろう。

柳川では2月3日から4月4日までのいわゆる「さげもんめぐり」の期間が「まねく/めでる」期間に相当する。この期間の華やいだ雰囲気を持続的に生み出すにあたっては、市内の観光拠点や商店街における華やかな吊るし飾り展示のみならず、比較的長い祭りの期間中に巧みに配置されたさまざまな小行事（サブイベント）も重要な役割を果たしている。これら行事のほとんどが新しい祭り（ひな祭りイベント）のために伝統的演出を盛り込み、戦略的に創出されたものであり、その都度「儀礼的賦活」を繰り返すことで2か月近くにおよぶイベント期間の賑わいを維持するアクセント（節目）の役割を担っている。それは全体としての祝祭的時間の継続を実現しようとする巧みな仕掛けとなっている。いうまでもなくこれらの小行事には華やかなさげもんが花を添えている。またこれらは外部からの客を招き入れるための行事であると同時に、地域の人びとも様々な参加の在り方で巻き込んだ「まねく/めでる」期間を構成している。

この「さげもんめぐり」のイベント期間が終了すると、さげもん飾りは初春の街の主役から背景へとしりぞく。一部は柳川のひとつの伝統工芸のシンボルとして土産物店や人形店のショウウィンドウを飾り続ける。そして女性たちはふたたび翌年のための準備、すなわち「つどう/つくる」活動をスタートさせる。イベントの終了後、地域の女性たちはさげもん作りに関わる。それは地域の手芸サークル、公民館の手芸教室、シルバー人材センターの手芸教室、あるいは個人宅での趣味の集まりなどにおいて、気どころの知れた仲間が集まっての製作活動である。基本的に趣味活動を目的とする女性たちのさげもん作りであるが、それには生涯学習や社会貢献（地域文化継承）、サイドビジネス等の側面も付随している。地域の女性たちはさげもんを作るという共通の目的を共有しつつも、一方で個人ごとの楽しみや意味づけをもって多様なグループでの制作活動に参加している。

さて、この「つどう/つくる」期間の成果を集約的に披露する重要な催しが1月の「さげもん即売会」である。またこの「即売会」は「つどう/つくる」時期と「まねく/めでる」時期の転換を標し付ける催しとして位置づけてもいる。多様な制作集団あるいは個人によって作られたさげもんやそのパーツが広い会場内に所狭しと並べられ地域内外から訪れた客に対して販売される。ここで購入されたさげもんは、県外への観光土産のほか、主として地域家庭の初節句を迎える家庭の雛壇を華やかに飾ることになる。「即売会」はさげもんの販売を主な目的としているが、作り手の女性たちにとっては絶好の作品発表の機会であり、技術をめぐる批評や学習の場となっている。

このように柳川のさげもん習俗、イベントを見てゆくとき、そこには地域の女性による「つどう/つくる」活動と、観光客を巻き込んだ「まねく/めでる」という活動が見いだされる。これら二つの活動がうまくつながり循環することによって柳川のさげもんは、新しい時代環境、社会環境のなかでたくましく継承されてゆくと考えられる。

＜一般家庭の初節句＞

新しい時代環境において吊るし飾りの継承を考える上で一つ忘れてはならない点は、観光イベントの開催と並行して地元の各家庭においては昔ながらの初節句が祝われているということである。今日でも柳川では地域のそこそこで初節句を迎える子どものために祝いの宴席を持ち、また美しい雛飾りの傍らには母や祖母、親しい女性が作ったさげもんを吊り下げ祝いの席を華やかに演出する姿を見ることができる。観光とともにとらえた年間習俗としてのさげもんカレンダーの循環を外円と位置付けるなら、家庭ごとの私的な初節句祝いは同じ向きにもうひとつの循環（内円）を構成しているとイメージされる。

両者は一見、距離を保って同時並行的に循環するように見えるが、実は相互に緊密な関連を持って循環している。観光客を初節句の個人宅に招き入れるツアー「初節句めぐり」はそうした関係性を象徴的に示している。そこで見られる地元民と観光客との活発な交流は、吊るし飾りを介した民間習俗と観光イベントの間の新しいインターフェイスを構成している。また多くの初節句家庭には（即売会で販売された）既成品のさげもん飾りが下げられるようになっており、ここにも観光イベントにより流通量を増やした既製品の吊るし飾りの影響がうかがわれる。二つのサイクルは相互に複雑に絡み合いながら相乗的に地域全体のさげもん作りの循環をうながしていると考えられる。地域の生活文化と観光化された文化との相互的關係をうかがうことができる。

＜酒田における平成傘福の創造＞

習俗と観光との結びつきのなかで生み出されている酒田の吊るし飾り（傘福）であるが、柳川と比較するとそこにはいくつかの大きな違いが見出される。その一つとしてもとの習俗との関係性の違いが上げられる。柳川のさげもんは地域の初節句習俗に深く組み込まれるかたちで制作され贈答されてきた吊るし飾りであり、現在の吊るし飾りの観光利用や活発な制作活動は今も継承されているそうした習俗を基盤に生み出されている。季節の習俗のなかで培われた地域手芸の技術・知識は、地元の女子実業教育の伝統ともあいまって、地元へ普及、定着していったと考えられる。また吊るし飾りの制作は祈りや祝いのための贈答品としての目的や用途を継承するのみならず、習俗性や季節性を超えた女性の趣味活動とその作品（成果物）披露という新しい目的や用途を得て現在に至っている。

これに対し、酒田の新しいつるし飾り（平成傘福）の場合、厳密に言えば地域における初節句の習俗的な基盤から切り離されたところに成立している。その意味できわめてユニークで創造的な新しい伝統造りの取り組みといえるだろう。平成傘福は初春のイベントや春の祭礼のなかで一種の公共的シンボルとして接する吊るし飾りであり、地元民の伝統的な初節句行事の延長上に位置づくものではない。また柳川のように毎年繰り返される制作、贈答、展示の一連の習俗をともなっていない。平成傘福は柳川のさげもんのように季節がめぐる度に「吊るし飾りを準備（手作り）し、贈り・贈られ、それを各家庭で客とともに愛でる」という一連の事柄を身近な地域社会において経験するわけではなく、初春のイベントや春の祭礼に際し、地域文化のシンボルとして様々な集団ごとに皆で作られ、披露し、愛でる対象となっている。ちなみにこの

習俗的不連続性に関しては、酒田あいおい工藤美術館館長の工藤幸二氏の調査から一部の富裕層宅で祝祭系傘福のミニチュア細工が、節句の時期に飾られていたという事実が少しずつ明らかになっている。しかし今のところ一般庶民の現行の初節句習俗のなかには未だそのような痕跡は見出されず、少なくとも傘福を初節句のひな人形と同時に飾ることが庶民の間で広く行われていた習俗であるとはいえない状況にある。

また傘福の吊るし飾りそれ自体に関しても、すでに市民の生活場面からは遠ざかっていた二系統の伝統傘福の要素（形態や意匠）を観光振興事業の中で現代女性の嗜好にあわせて再創造し新しく生み出した手工芸である。さらに関連して、柳川のような地域手芸の伝統から派生したと思われる持続的で多様な制作集団がない。商工会の事業をきっかけに立ち上げられた新しい傘福の創造は、女性会（商工会議所の下部組織）や傘福クラブ（傘福の中心的展示場に常駐する制作集団）、一部土産小物の製造販売業者などを中心に、地域社会や地域一般女性とは切り離されたところで限定的におこなわれている。イベントや祭りの際に地域（商店街）や各種の団体による傘福制作の集団がその都度形成されるのである。それらは一年を通した持続的制作集団とはいえず、柳川の制作集団の形態とは大きく異なる点といえよう。

一方、特に祈願系の伝統傘福は酒田の周辺地区において、細々とながら、作り続けられていることも記憶しておかねばならない。

＜地域文化の活用と説明責任＞

創造された伝統の傘福は明確な活用目的を持って生み出された地域手工芸品である。それは地域の文化資源を活用して観光振興をめざすという商工会の事業のなかで誕生した。別稿（坂元 2012）で詳しく跡づけたように、現行の初節句習俗との関連性が薄いなかで立ち上げられた平成傘福のプロジェクトは、その民俗的、歴史的文脈よりも傘に下げられた細工物それ自体の趣向に関心を寄せ、これを現代的な和のクラフトとして洗練することに力が注がれた。新しい平成傘福は寺社への奉納物（祈願系）、山王祭の山車飾り（祭礼系）という二系統の伝統傘福の細工物のなかから適宜選択し再構成されたものであり、厳密な意味において習俗的にも意匠としても伝統との連続性をもたない創造された手工芸だった。

女性会の努力の結果、イベントや祭りを通して市民の間でも新しく創造された傘福への関心が高まるようになってとともに、女性会はあらためて伝統と現代の両傘福の習俗や意匠における連続と不連続の問題にきちんと向き合う時期をむかえることになる。新しい傘福が市民の間に浸透することは事業の成果、メンバーの努力の結果として喜ばしいことにはちがいない。しかし一方で、本来は地域のすべての人間の共有財産であるはずの文化資源を、たとえ地域振興のためとはいえ一部の人間の都合や判断で勝手に流用しているという厳しい指摘もまぬがれないのである。たとえば華やかな平成傘福が信仰の対象としての傘福本来の姿からはほど遠いといった一部の地元民の批判もそのひとつの例である。

このような共有文化資源の活用をめぐる課題に対して、女性会では伝統傘福の民俗調査や痛んだ古い傘福の修復・復元活動を積極的に実施し、社会的（説明）責任を果たそうとしている。伝統の傘福の実態や歴史を生活の文脈もふくめ実証的に明らかにすることを通して、不連続は

不連続として客観的に説明する努力を行っている。女性会にとって自らが創造した新しい傘福と伝統傘福との関係をそれが生きられる文脈もふくめ正確な知識として市民に伝えようとする真摯な姿は、確実に地域の文化資源を活用した者たちの社会的責任あるいは説明責任を果たすことにつながっている。その上で新しい伝統としてプロデュースされた傘福が今の酒田が人びとの生活のなかでどのような役割を果たしているのか実態を把握し、またそれは今後どのような役割をはたすべきなのか展望を描くことを通して酒田市の将来に向けた事業の新しい方向性と展開を模索することが重要であるといえる。

地域振興事業と調査事業の二つの柱を持った女性会の活動のあり方は、現在日本のさまざまな地方、農村地域で展開しつつある地域学／地元学と称される社会運動と重ねて合わせることができるだろう（廣瀬 2007）。それは住民が自分たちの生きる地域の学習、調査を通して地域や文化の固有価値を発見し、ものづくりや生活づくり、地域づくりの実践へとつないでゆくための思想と技法である。それはまた地域学／地元学は地域文化に対する客観的で内省的な態度をともなっている点において、地域の文化資源の活用マニュアル的役割だけでなく活用することそれ自体に対する批判的な視点も併せ持っている。酒田商工会議所女性会の傘福事業は伝統を創造的に更新する独自の発想と伝統探求への実践的かつ真摯な姿勢によって、すでに酒田を舞台とする地域学／地元学としての一步を踏み出しているのである。

＊本研究は平成 23 年度科学研究費補助金（課題番号 23520989「地域再構築における中高年女性の伝統手芸活動と民俗技術の多様化」基盤研究（C））からの助成にもとづいている。

参考文献

- ・廣瀬隆人 2007 「「地域づくり」で学習し力をつける、次世代を育てる」『農村文化運動』No.184、pp.76-82。
- ・E.ホブズボーム／T.レンジャー1994（1992）『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭他訳 紀伊國屋書店。
- ・工藤幸治 2010 「酒田傘福のルーツ」講演資料。
- ・酒田商工会議所女性会 2012 「湊町酒田の傘福その取り組みについて」酒田商工会議所女性会 傘福事業資料。
- ・坂元一光 2012 「伝統を創造する女性たちー酒田の傘福復興事業と地域学/地元学ー」『国際教育文化研究』vol.12、pp.1-15
- ・2012 「地域女性の学習資源としての手芸伝統ー柳川のローカルな知をめぐってー」『九州大学大学院教育学研究紀要』第 14 号、pp.59-73。
- ・山崎裕子編 2006 『雛の吊るし飾り』三弥井書店。

Inventing the tradition of *Kasafuku* and generating of *Tiikigaku*

Ikko SAKAMOTO

Sakamoto gave a special lecture on Inventing the tradition of *Kasafuku* (traditional hanging ornaments) and the social movement, *Tiikigaku* (participatory area studies) in Sakata city, Yamagata prefecture by Sakamoto. The female members of the Sakata chamber of commerce have created a new types of *Kasafuku*. The emergence of a new tradition of crafting small, handmade stuffed figures of silk or cotton among Sakata residents is thus a revival of longstanding local traditions that have been handed down from generation to generation. In the lecture I discussed the newly emerged *Kasafuku* tradition, examining the manner in which local women have combined aspects of two different tradition. And I also reflects on how the steps that these women took to combine tourism promotion with local field research are a practical example of local participation in a trend termed *Tiikigaku*, participatory area studies. This provides not only an objective yet introspective perspective on local culture but also a critical understanding of the utilization of local cultural resources. This in turn provides an intellectual framework that is connected to sustainable local development and the growth of local businesses using cultural resources.